

テオソフィア

T H E O S O P H I A

J a n u a r y & F e b r u a r y

T O P I C S

APHORISM

神智学の要約

神智学の鍵

チャクラについて

今月の ひとこと

前回の勉強会で「チャクラ」についてのディスカッションが終わりました。個人的に面白かったのは、七つのタットヴァについての説明、HPB が七つのマスターチャクラが頭脳にあると言っていたところ、クンダリーニ・ヨガなどのハタヨガに対して否定的だったところですかね。「チャクラ」については自分でもいろいろ考えてみたいテーマだったので、良い機会になりました。

次回の勉強会からは、スバ・ラウの「バガヴァッド・ギーターの注釈」を勉強していきたいと思っています。「ギーター」は何度か読んだことがあるのですが、ちゃんと内容について議論したことがないので楽しみです。参加される方は、一度バガヴァッド・ギーターを読んできると内容を理解しやすいと思います。引き続き Youtube でも公開していきたいと思いますので、ご興味ある方はまたご覧ください。

会長 岡本

テオソフィア

1・2月号 vol.41

神智学協会ニッポン・ロッジ会報誌

APHORISM	1
神智学の要約	3
神智学の鍵	4
チャクラについて	15

APHORISM (第 23 回)

高橋 直継

物語でしか語り得ない真実とは

ある事実に対してそれぞれの真実があるとするならば、真実とは、それぞれの人の心の中にこそ存するものと言える。それは一言では善とか悪とか、白とか黒とかとは言い難い事柄であるからこそ、物語として語られるのであり、その中から一言では表現し難い真実を自分で見出すしかないということである。

ただし、それも唯識派の認識からすれば、言葉によって構想された虚妄に過ぎないということである。

それを竜樹は「世俗諦」と呼んだ。

ヴィジュニャーナ
識

「分かる」ということ自体が「識」の働きである。*

「それは一体何を意味しているのか？」と問うとき、その意味が「分かる」ということが「識」、殊に「意識」を働かせるということである。

* 「ヴィジュニャーナ」の「ヴィ」には「分ける」という意味がある。故に、「ヴィジュニャーナ」とは、「分けて知る」という意味になる。

マーヤー・パティ (マーヤーの主)

大阪なおみが世界ランキングの一位になり、嵐が活動を休止するという。

それによって歓喜する人々がおり、悲しみに暮れる人々がいる。

世界はそのようにして維持されているのである。

ゆいしきゆがぎょう
唯識瑜伽行

チッタ (心) は唯識においてアーラヤ識に相当する。

チッタ・ヴリッティ・ニローダ*とは、唯識論的に言えば、アーラヤ識を転依**させることである。

*パタンジャリによる「ヨーガ」の定義。(『ヨーガ・スー

トラ』第1章2節)

**転依 (アーシュラヤ・パラ・ヴリッティ) とは、迷いの拠り所 (アーシュラヤ) であったアーラヤ識が転じて悟りの拠り所に変化すること。神智学の体系では、第4インシエーションにおけるコーザル体の崩壊に相当すると思われる。

知識のヨーガ (ジュニャーナ・ヨーガ)

「知識がある」ということは、「見える」ということである。*
「見える」ということは、「目覚めている」ということである。

*サンスクリットのヴィドゥ (知る) という動詞は、ラテン語のヴィデオ (見る) になり、英語の I see も「分かった」という意味になった。サンスクリットのブドゥには、目覚める、知る、悟るなどの意味がある。

神は存在するのか?

神は存在するのか?

仏教徒は「私」は存在しないと主張する。

ヴェーダーンタ派は、「神」は「私」と同一であると主張する。故に、仏教徒から見れば、ヴェーダーンタ派の主張するような「神」も存在しないということになる。

アストラル人間

本能に支配された動物と、理性を持つ人間とのあいだに、イメージによって支配され、イメージによって動かされる、人類の大多数を占める「大衆」と呼ばれる存在がある。そのような人々を神智学では「アストラルに偏極している」という。

広告文化が経済を動かす強力な原動力として機能し、それが人間の生活の大部分を支配しているのを見るならば、現代社会が「アストラル人間」の社会であることが分かるであろう。

レムリア時代の初期の人類が「動物人間」と呼ばれたよう

に、我々は未だ「アストラル人間」の段階にあるのだということを自覚しなければならない。

神智学の起源

仏教やヴェーダーンタ派やヨーガ派は悟りや解脱への道を示すが、神智学は、その道を人間の進化の過程と捉え直し、それはイニシエーションのプロセスによって促進されるのだと主張する。

そのイニシエーションのプロセス（儀式）には、当然、イニシエーター（導師）の存在が想定されており、それ故、それは古代の密議宗教に由来すると考えられるのである。

変化に正しく対応しないことが「悪」という思想

お役人気質こそが悪の根源である。

いわゆる「お役人仕事」というのは、ウイット（機智 / 智慧）すなわち臨機応変の才に欠けている状態のことを指す。

さらに悪いことには、市民の種々の緊急の必要には全く融通をきかせられないのに、自らの不正や汚職についてはものの見事に臨機応変の才を発揮できるというのも「お役人」という輩である。

こういう輩の腐った性質を瞬間瞬間に破壊していくためにこそ、破壊の神であるシヴァ神の力が必要となるのである。（『テオソフィア』2017年11・12月号所収「APHORISM」第16回より再録）

臨機応変に自分で考えて行動する知恵を奪う前例主義とマニュアル主義

救命救急活動中の女性看護師に対して「女性は土俵から降りてください」と繰り返した場内アナウンスが問題になっている。

「規則だから命を救うことはできません」というのは、見相や生活保護の窓口では日常的に行われていることである。

臨機応変の知恵もないのに規則を無視して個人が自分勝手に行動するのはもちろん良くないことなので、どうしたら知恵のある人材が少数ではなく多数である社会が実現するのかを考えなければならない。

それにはまず、それを生きingことを前提とした倫理や哲学の教育や研究がもっと一般的なものとなる社会を目指す必要があるのではないだろうか。

（『テオソフィア』2018年3・4月号所収「APHORISM」第18回より再録）

前例主義とマニュアル主義からの脱却

前例のない、従来のマニュアルが全く役に立たない時代に急激に突入してしまった観のある近年、前例とマニュアルを重視する官僚的な思考がますます役に立たなくなってきたており、ますます害を及ぼすようにもなってきたている。

このように前例のない、マニュアルも役に立たない状況に対処できる人材が絶望的に不足しているようにも見えるなか、ゆとり教育世代といわれる今の10代～20代の若者世代は全体として前例やマニュアルにとらわれない独自の価値観や生き方を大切にしている世代のようにも見える。地球規模の大きな時代の転換期を迎えた今、この新しい感覚を持った若者たちが、これから前例のない新しい時代を創っていくのである。

であるから、この前例のない、役に立つマニュアルも存在しないような状況に対処できる人材を育成するための新しい体制づくりが、社会においても教育現場においても、急務とされているのである。

（同上）

神智学協会の使命

古代科学におけるエネルギーの人格化の術は、近代科学の数値化の術に相当する。

どちらも目に見えない（五感でとらえることのできない）エネルギー（神々）を目に見えるかたちに変換し、実際に操作できるようにする技術である。

したがって、「科学」とは本来的に「魔術」のことであり、「サイエンティスト」とは「魔術師」の別名であった。

故に、そこに正しい倫理や智慧がともなっていなければ、それは限りなく破壊的なものとなる。

人心の操作を旨とする政治家や大手メディアもまた、コトバや統計の魔術などを弄する現代の魔術師たちであり、彼らの無智と邪悪な動機のおかげで哀れな人類とこの惑星は破滅の方向へとまっしぐらに導かれている。

この、どうしようもない破滅への流れを食い止めるために、忘れられた古代の智慧と倫理を復活させようと努力するのが神智学協会の担った役割ではなかったか？

私は「APHORISM」の第1回冒頭で次のように宣言した。すなわち、「いつも時間が経つと本来性が失われる。失われた本来性を取り戻すことが哲学や神智学の使命である」と。（『テオソフィア』2017年5・6月号所収「APHORISM」第12回より再録）

（つづく）

神智学の要約 1

著：W・Q・ジャッジ 訳：星野 未来

「智慧の宗教」である神智学は、遠い昔からあった。それは私たちに自然界と生命の理論を提供する。その理論は過去の賢人、特に東洋の賢人によって獲得された知識に基づいている。そしてその高弟たちは、この知識が想像上のものあるいは推論ではない、と断言し、見て知るために必要な条件を遵守しようとしている人たちによって見て知られている現実の知識である。

神智学は神の、あるいは神についての知識*¹を意味する。「神」という用語は、既知も未知も両方ともすべて含むものとして一般的に受け入れられ、その結果「神智学」の語は絶対者と関係のある智慧を意味する。そして、絶対者には始まりがなく永遠であるから、この智慧は常に存在してきたに違いない。それゆえ、神智学はしばしば智慧の宗教と呼ばれる。なぜなら、いにしへの時代からそれは霊的、道徳的、物質的なものを支配するすべての法則の知識を有していたからである。

神智学が提供する自然界と生命の理論は、最初に推論が定められ、次にそれに合うように事実または結論を調整することによって証明されたものではなく、ふだんのマインドから自然界の働きを隠すカーテンの向こう側を見る力を得た人たちが達した知識に由来する、存在と宇宙と人間の説明である。このような人たちは、用語の最高の意味で「賢人」と呼ばれている。最近ではマハートマとアデプトと呼ばれている。古代には彼らはリシそしてマハーリシとして知られていた。マハーリシとは「大」リシという意味である。

これらの高貴な存在すなわち賢人が、東洋にのみ存在していたとは言われていない。彼らは後に述べる周期の法則に従って、地球のあらゆる場所に住んでいたことが知られている。そしてこの惑星の人類の現在の発達段階に関する限り、彼らは今は東洋で発見されることになっているが、何人かは遠い昔にアメリカの海岸からさえ隠れ住んでいたかもしれない。

この「智慧の宗教」の学徒の間にはさまざまな段階が必然的にあるため、低い段階にいる者はその到達した段階の

資質と同じ程度の知識しか与えられないことは当然のこと、すでに高い段階に達した学徒にはさらに知識が与えられることも、達した段階しだいなのである。この存在が主張されている高い段階の学徒たちの知識こそは、ただの推論ではなく、彼らが見て知った現実に関係するのである。彼らの何人かは神智学協会と関係がある限り、さらに上の段階にいる。そのような法則を見て絶対的に知る力は、それに先立って従わねばならない固有の規則に取り巻かれている。そしてそれゆえに、これらの状態が実現されるまでその人はそれを理解できなかったのも、俗世の人間の要求に応じてこの智慧をすぐに述べることは不可能である。この知識は法則や物質の状態、そして「実用的な」西洋では夢にも思われていない意識について扱っているため、学徒は不適切または誤った理論による自分の先入観の破壊を推し進めながら少しずつ理解するしかできない。次のことがこれらの高位の学徒によって断言されている。特に西洋では、誤った推論の方法が何世紀にもわたって広く一般に存在しており、その結果、普遍的なマインドの習慣として人は多くの結果を原因とみなし、現実を非現実的なものとみなし、そうしながら非現実的なものを現実の場所に置く。小さな例として、メスメリズムと千里眼の現象は最近まで西洋の科学によって否定されてきたが、それでも非常に多くの人々は、その不可解な内観的証拠、これらの現象の真実、そして場合によってはそれらの原因と論理的根拠を理解している。

(つづく)

* 1 神人同形説的などという意味ではなく、神の「神聖な」智慧という意味である。

神智学の鍵

著：H・P・ブラヴァツキー 訳：田中 恵美子

個人と人格我について*

* 『仏教問答』にもオルコット大佐は秘教哲学の論理で、このような区別をしなかった東洋学者達の誤りを正さざるを得ぬと気づき、これについての自分の見解を述べている。「ある存在の愛欲によって凝集する構成分子（蘊）がこの世に出生するために降りて来て、一連の人格我として次々と現れる。誕生ごとに人格我はこの前の生や次の生の人格我とは違う。カルマは影武者として、今は聖者、今度は職人、また次と誕生の糸に連なって異なる姿の仮面をつける。あるいはむしろ、それに自分を反映すると言ったほうがよいだろうか？ しかし、人格我は常にも変わっても、幾多の人格我をビーズのようにつなぐ生命の糸は切れずに続くのである。この糸はいつも同じで、決して他の糸とはならない。従って、それは個性的であり、個性的生命波動であって、ちょうどエーテルを通じて進む光波や熱波がその原動力＝源から始まるように、生命波は涅槃すなわち自然の主観的な面で始まったものである。そして生命の糸はカルマの衝動とタンハー（生存への飽き足らぬ欲望）の創造的な指導を受けて、自然の客観的な面を進み、たくさんの周期的変化を経て涅槃へと戻るのである。リース＝ディヴィッツ氏は個性の連鎖に沿って人格我から人格我へと伝わって行くものを《性格》または《行状》と言っている。《性格》は単なる形而上学的な抽象物ではなく、個人の精神的特性および道徳的傾向の総計なので、もし私達が前述の生命波を個性と考え、また、連続する誕生の一つひとつを個別的な人格我と考えるならば、リース＝ディヴィッツ氏の言う《神秘という非常手段》（『仏教』一〇一頁）の必要性を払い除ける助けとなるのではないだろうか？ 仏教の立場から言えば、完全な個人は仏陀であると思う。なぜなら、仏陀はわずかな超自然的混入物もない、人類のまれ

に咲く花としか言えないからである。人間が仏陀になるには、無数の世代、四アサンキューヤ（無数）と十万周期（劫）〔フォースポール氏とリース＝ディヴィッツ氏共著『仏陀誕生物語』一三頁〕を要し、長い長い輪廻の連続のすべてを、仏陀になろうとする鉄の意志で貫かねばならぬが、このように意志を働かせ、その意志を維持し続けるものを何と呼んだらよいのだろうか？ 性格と言うべきだろうか？ 個性つまりどの一生にも部分的にしか現れないが、あらゆる誕生からの断片で作られていて個性というべきだろうか？」（『仏教問題』追加A一三七）

【問】 個性と人格我はどう違うのですか？ 私はまだ少しも分かりません。まさに、その違いこそ、あなたは私達の心によく印象づける必要があります。

【答】 私はいつも分かってもらいたいと努力していますが、不幸なことに、ある人にはそのような真実を理解するよりも、正統宗教が教える子供っぽい、あり得ないことに頭を下げるほうが容易なのです。というのは、正統なものには世間に認められるからです。この概念をよく理解するには、まず人間の本質が二つの組から出来ていることを学ばなければなりません。つまり、霊的諸本質、不死の自我に属するものと、物質的諸本質、その自我の媒体となる常に変化する諸体、自我の人格我の一連となる本質です。それらの本質に決まった名称をつけましょう。つまり、

(1) アートマンすなわち「高級我」はあなたの霊でも私の霊でもなく、日光のように万人を照らします。それはあまねく行き渡っており、日光の光線が日光から切り離せないように、アートマンはその唯一で絶対の超霊（Meta-Spirit）から切り離せません。

(2) ブッディすなわち霊的魂はアートマンの媒体にしかすぎません。神聖な一對、アートマン・ブッディがある段階の意識に同化されて、その意識に反映しなければ、ア

トマンとブッディはそれぞれ離れていても、または二つ結合していても、人間の体には何の役にも立ちません。それはちょうど、地中に埋まっている花崗岩(かこうがん)の塊には日光とその光線は役に立たないのと同じことです。アートマンにもブッディにもカルマは届きません。なぜなら、アートマンはカルマの最高面、すなわちある面ではカルマを働き出させるものであり、ブッディは物質界では無意識だからです。この意識すなわち心は、(3)マナス*。これはアハンカーラの反映として出来たものです。アハンカーラは「私という概念」すなわち我性(Ego-ship)です。従ってマナスはアートマンとブッディに離れず結合した場合には、霊的自我(Spiritual Ego)と言われ、またタイジャサ(輝くもの)と言われます。これが本当の個性すなわち人間の神聖な部分です。この自我はもともと知性のない人間の形体に化身したのですが、その形体は自分の中に存在している二重のモノイド(アートマン・ブッディ)から生命を与えられていました。しかし意識がなかったのでモノイドを意識しませんでした。その人間のような形体を本当の人間にしたのはこの自我です。自我はカルマに従ってある人格我に生まれ変わらなければなりません、そのたびごとに自我すなわちコーザル体(原因体)はその人格我にオーバーシャドウします。すべての新しい体、または人格我によって犯されたあらゆる罪の責任をとるのは自我です。人格我は再生の長い連続の間中、本当の個性を隠す仮面にすぎません。

* マハットすなわち「宇宙マインド」はマナスの源である。マナスとは人間におけるマハット、すなわち心である。マナスはクシェートラジュニヤすなわち「肉体化身した霊」とも言われる。なぜなら、私達の哲学によれば、私達の第四ラウンドの第三根本人種の人間に化身することにより、考える人間すなわち「マヌ」を創造した、あるいはむしろ生み出したのは、マーナサプトラすなわち宇宙マインドの息子達だからである。従って、本当の化身する永久の霊的自我＝個性はマナスで、私達の様々で数え切れぬほど多い人格我は、その外部的な仮面にしかすぎない。

【問】 これは公平ですか？ なぜこの自我は忘れてしまった行為の結果として罰を受けなければならないのですか？

【答】 自我はしたことを忘れたわけではありません。あな

たが昨日したことを覚えているように、自我は自分の間違いを知っているし、覚えています。今の体が、自分が何も覚えていない前生の行為のために罰を受けるのは不当だというのは、リンゴを盗んだために鞭打たれる少年がはいている新しい長靴が自分は知らないのだから、少年の罪のために罰せられるべきではないというのと同じように不合理です。

【問】 霊の意識や記憶力と人間の意識や記憶力との間に連絡方法はないのですか？

【答】 もちろんあります。しかし、近代科学の心理学者達には決して認められていません。直観すなわち「良心の声」、予感、漠然として定義できない回想などは、もしこのような連絡がないならば、何によるものと考えられるのですか？ 少なくとも、多くの教養ある人達はコールリッジのような優れた霊的認識力をもっていけばよいのですが。彼の論文で、コールリッジがどんなに直観的であるかが分かります。「多分、すべての思いは不滅である」という考えについての彼の意見をお聞きなさい。「知的能力[記憶力の突然の復活]をもっと普遍的にするには、つまり過去の全存在[あるいはむしろ過去の諸存在]のすべての経験をあらゆる人間の魂に示すには、この世の体の代わりに天の体が必要である」。この天の体こそ、私達のいうマナス的自我です。

自我の賠償について

【問】 化身した人間のこの世の生涯はどんなものであっても、自我は決して死後の罰を受けないとあなたは以前言われたことがあります。

【答】 極めて例外的な場合以外は、決して受けませんが、ここではそのような場合については話しません。いずれにしても、罰の性質は地獄に落ちるといふあなた方の神学概念とは全く違うからです。

【問】 しかし、もし前生で犯したある過ちのために今生で罰せられるとすれば、この世にいてもあの世にいても、賞を受けるのもこの自我であるはずですか？

【答】 その通りです。私達がこの世以外のどんな罰も認めないのは、来世では霊的我が知っている唯一の状態は純粋な至福だけだからです。

【問】 どういう意味ですか？

【答】 客観的世界、物質の世界で犯した犯罪は純粋に主観的な世界では罰を受けることはできないと言うだけのことです。私達は地獄や天国を場所として信じてはいません。客観的な地獄の火や、永遠に死なない蛆^{うじ}のいることも、サファイアやダイヤモンドを敷きつめた通りのある天上のエルサレムがあるなどということも信じてはいません。私達は、死後の状態ははっきりした夢を見ている時のような精神状態であると信じています。私達は絶対的な愛、正義、慈愛の不変の法則を信じています。それを信じて、私達は次のように言います。つまり、今化身している自我達の罪やもとのカルマ的罪の悲惨な結果が何であろうと*、人間（すなわち霊的実在の外部の周期的に現れる物質的形体）に自分の誕生の結果に対しての責任を公平に負わせることはできません。人間は生まれることを頼みはしないし、命を与えてくれる両親を選ぶこともできません。あらゆる点で人間は自分の環境の被害者であり、自分でコントロールできない境遇の子です。もし、人の罪の一つひとつを公平に調べたら、十中九は罪人というよりも、罪を被^かむっていたことが分かります。人生はせいぜい無情な芝居であり、嵐の海の航海であり、背負い切れぬ重荷であることが度々です。最も偉大な哲学者達は人生の存在理由を探って、見つけ出そうと努力をして来ましたが、その鍵を握っていた人々すなわち東洋の聖者以外はみな失敗しました。シェイクスピアが描いている人生とは、

……歩いている影法師、下手な役者にすぎず、
舞台ではいばり散らし、気をもませるが、
その後は何の便りも聞かれない。
人生は狂気の沙汰でいっぱい白痴の物語で、
何の意味もない……（『マクベス』五場五景より）

個々別々の人生には意味はありませんが、いくつもの人生からできた連続にはたいへん重要なものがあります。とにかく、ほとんどの人生は全体としては、悲哀です。哀れな無気力の人間が朽ちた材木のように、人生の荒波にもあそばれてから、もしその人が弱すぎて波に耐えられないなら、永遠の地獄の中で罰せられたり、または一時的な罰を受けたりすることなど、信じなければならぬでしょうか？ 決して信じるべきではありません！ 大罪を犯した人でも、あまりひどい罪人でなくても、善悪、有罪無罪にかかわらず、一たび肉体生活の重荷から解放されると、疲れてずたずたになったマヌ（「考える

自我」）は絶対的な休息と至福の期間に入る権利を得ます。慈悲深いというよりは、間違いのない賢明な法則は、化身した自我に地上で前生の間に犯したすべての罪に対してカルマ的な罰を与えるが、死後、肉体を脱した人間に長い精神的な休息を許します。つまり、一人の人格我として前生で起こったすべての悲しい出来事は最も小さな苦痛の思いに至るまで、全く忘れることができるようにします。そして魂の記憶の中には至福であった事や幸福を与えたことだけが残ります。「魂はすべてを忘れて体にとび込む」ので、私達の体こそ本当の忘れ川であると言ったプロティノスの言葉は最初に思ったよりも深い意味があります。なぜなら私達の地上の体は忘れ川のものであると同様に、デヴァチャンでの私達の天の体もそうですし、しかも、それ以上のものです。

* 墮落天使達についての残酷で不合理な教えは、この「もとのカルマ的罪」に基づいている。それは『シークレット・ドクトリン』の一卷に説明されている。私達の自我達はすべて、思考力のある、理性をもった存在で（マーナサプトラ）、人間としてか、他の形体でか、前の生命周期（マンヴァンタラ）に生きて、そのカルマでこの周期に人間に化身することになった。秘儀の中では次のように教えられている。つまり、カルマの法則に従うことに遅れたので（またはヒンズー教のいうクマーラ達とキリスト教の伝説の大天使ミカエルのように「創造することを拒んだ」ので）、つまり、ちょうどよい時に化身することに失敗したので、自我達のために予定されていた体は汚された。『シークレット・ドクトリン』二巻『ジヤーンの手紙』のスタンザVIIIとIX参照。ここから知性のない形体の原罪と自我達の罰ということが出てきた。謀反を起こした天使達が地獄に投げ落とされたということは、清浄な霊達＝自我達が不浄な物質の体すなわち肉体に閉じ込められたという意味である。

【問】 それでは、殺人やあらゆる形で神や人間の法則を犯した人は罰を受けないですむというわけですか？

【答】 そんなことを誰が言いましたか？ 私達の哲学には最も厳格なカルヴィン派の教えのように厳しい罰の教えがありますが、ただそれよりもずっと理性的で絶対的正義にかなっているだけです。いかなる行ないも、罪深い思いさえも、罰せられずにすむことはありません。思いは行ないよりもずっと悪い結果を生み出す可能性があるから行ないよりももっと厳しく罰せられます*。私達は

カルマと言われる応報の誤りない法則を信じています。この法則は原因とそれに対する避けられぬ結果の自然の連鎖となって現れます。

* 「しかしわたしはあなたがたに言う。だれでも情欲をいだいて女を見る者は心の中ですでに姦淫をしたのである」(『マタイによる福音書』五章二八節)。

【問】 どうやって、どこで、その法則は働くのですか？

【答】 「働き人がその報いを得るのは当然である」(『ルカによる福音書』五章七節)と聖書は言っており、善悪いづれものすべての行為は、多くの子を生む親であると大昔の賢者は言っています。この二つの真理を合わせてごらん下さい。するとすべての道理が分かってくるでしょう。カルマは、個別の人格我としての人生の苦痛から脱した魂に十分な、実に百倍もの代償を与えておいて、次にその魂が再び化身する時まで、五蘊の大軍を率いてデヴァチャンの戸口で待ち構えています。そこから自我は新しく生まれ変わってくるのです。今、休息から目覚めた自我の未来の運命が、まさにこの瞬間に決まります。自我は再び、活動するカルマの法則に支配されるようになるからです。自我の前生の罪が罰せられるのは、自我のために用意されているこの再生においてです。新しい人生は、この神秘で容赦のない、しかも判決の公正さと賢明さで絶対に誤りのない法則によって選ばれ、用意されるのです。自我が投げ込まれるのは、芝居がかった焰や尻尾や角のあるばかばかしい悪魔達のいる想像上の地獄ではなく、この地上です。つまり、自分が罪を犯したこの世界でこそ、あらゆる悪い思いと行ないを贖(あがな)わなければなりません。自分の蒔いた通りに刈り取るのです。輪廻の法則は、直接であろうと間接であろうと、また、無意識の内にさえ、自我の過去の人格我的手

から苦しみを受けた他の自我達をすべて、この自我の周りに集めるでしょう。その自我達は因果応報の女神によって、昔から存在していた永遠の自我を秘めている新しい人格我に出会うようにされるのです。……

【問】 そのような新しい人格我達は自分が罪を犯したことも、罪を被ったことにも気づかないなら、あなたの言われる公正はどこにあるのですか？

【答】 人が盗まれた上衣を自分のものと認めて、それを着ている泥棒から剥ぎ取って、きれぎれに引き裂いたとしたら、盗まれた人は自分の持ち物を公平に扱ったと考えられますか？ 新しい人格我は、色、形、質などの特徴のある新しい一揃えの着物にしかすぎません。しかし、それを着ている本当の人間は昔と同じ泥棒です。人格我のために苦しむのは個性です。そして人間それぞれの運命が、見かけ上だけですが、ひどく不公平に思えるのはまさにこのためです。なぜ、見たところ罪を犯したことがないのに、多くの善人が大都会のスラム街で、飢えに苦しむ貧乏人に生まれ、苦しみばかりを受け、運命の女神にも人々にも見捨てられるのでしょうか。また、このような人達は貧民窟に生まれるのに、他の人達は宮殿に生まれるのもなぜでしょうか。いちばん悪い人達が貴族や金持ちに生まれるのに、上流の生まれで価値のある人はごく少ないこと、また、乞食に生まれてはいますが、その人達の内なるものは最も高尚な人達と変わらないのはなぜでしょうか。このことや、もっと多くの理由を近代哲学者達や神学者達が私達に十分に説明して下さったなら、その時初めて、あなた方は輪廻論に反対できますが、それまでは反対する権利はありません。詩人達の中のいちばんすばらしい人達はかすかにこの真理中の真理を悟りました。シェリーは輪廻を信じましたし、シェイクスピアが家柄の無価値について書いた時、輪廻に関して考えたに違いありません。彼の次の言葉を思い出して

『神智学の鍵』

著：H・P・ブラヴァツキー
訳：田中 恵美子

電子書籍 Kindle 版
定価 1000 円



【本書について】

本書は、H・P・ブラヴァツキーによって1889年に出版されました。それは、大著『シークレット・ドクトリン』の翌年のことであり、たいへん難しい神智学の内容を入門者向けに解説することと、当時様々な批判にさらされていた神智学協会と彼女自身の風評に反論するために書かれました。ブラヴァツキー自身の手による神智学入門書です。

ごらんください。

なぜ私の家柄は私が向上しようとする心を押えようとするのか？

すべての物は時に支配されるのではないだろうか？

もとは王家の出であっても、

今生では乞食である者は多い。

また、今は君主である人は多いが、

その先祖は昔は下層民だった。

「先祖」という言葉を「自我」に変えてごらんください。

そうすれば、本当のことが分かるでしょう。

第九章

カーマ・ローカとデヴァチャン

死後、低級諸本質はどうなるか？

【問】 あなたはカーマ・ローカと言われますが、それは何ですか？

【答】 人間が死ぬと、その低級三本質、すなわち肉体、生命、生命の媒体である生きた人間の複体（アストラル体）は永久にその人から離れます。それから四本質つまり真ん中の本質である動物魂カーマ・ルーパおよびカーマ・ルーパが低級マナスから同化したものと、それに高級三つ組がカーマ・ローカに入ります。カーマ・ローカはアストラル界で、スコラ神学のリンボ界、昔の人の言う黄泉の国ですが、厳密に言えば場所と言えるかどうか分かりません。それは一定の領域も境界もなく、主観的空間の中にあります。つまり、私達の五感を超えたものです。それでも存在しており、動物を含めて、生きていたすべてのもののアストラル形体（eidolon）が第二の死を待っているのはここです。動物達の場合には、最後にアストラル分子が崩壊し全く消失すれば、第二の死がきます。人間の幽霊の場合には、アートマン・ブッディ・マナス

の三つ組がデヴァチャン状態に入ることにより、低級諸本質すなわち前の人格我の反映から分離する時に第二の死が始まるのです。

【問】 そのあと何が起こるのですか？

【答】 それから、カーマ・ルーパの幽霊は、思考原理（高級マナス）から知性を吹き込まれなくなり、マナスの低級面すなわち動物的な知性は高級マナスから光を受けることなく、また媒体としての肉体の脳もなくなり、崩壊します。

【問】 どのように崩壊するのですか？

【答】 低級マナスは、脳のある部分が生体解剖者に摘出された蛙のような状態になり、最も低級な動物的段階でさえも考えることはできなくなります。そうすると低級マナスでもなくなります。低級マナスは高級マナスがなければ、何にもならないからです。

【問】 降霊術の会に霊媒を通して出てくる実体のないものはこれですか？

【答】 そうです。推理力や深く考える力がないという点では本当に実体のないものですが、たとえどんなにアストラル的で流動的であっても、やはり一つの実体です。アストラル幽霊が磁力によって無意識的に霊媒に引きつけられて、いわば、霊媒を代理としてしばらく生き返り、霊媒の中で生きている場合はそうです。この幽霊＝カーマ・ルーパはくらげにたとえることができます。くらげはその本領内すなわち水の中にいる間は、稀薄なゼラチン状をしていますが、水から出して手の平や砂の上に置いたり、特に日光にさらすと、たちまち溶けてしまいます。霊媒の特異性のあるオーラの中に、幽霊は一種の代理的生命をもっており、霊媒の脳や居合わせる他の人達の脳を通して推理したり、話したりします。しかし、この話題は横道にそれ過ぎ、他人の領域に入ることになりますので、私は立ち入りたくありません。輪廻の問題を続けましょう。

【問】 自我はどれくらいデヴァチャンの状態にいるのですか？

【答】 それは地上界に生きた時の霊性の度合いと功罪いかんによると教えられています。すでにお話したように、平均は千年から千五百年です。

【問】 しかし、デヴァチャンにいる自我は、なぜ、心霊主義者達の言うようにこの世に現れて人間と連絡できないのですか？ 母親がこの世に残した子供と連絡したり、死んだ夫が妻に連絡したりするのを妨げる何かがあるのですか？ 連絡できるという考えはたいへん慰めになるでしょうし、それを信じている人達はその考えを捨てよ

うとしないのは不思議ではないと思います。

【答】 作り事がどんなに慰めになっても作り事よりも真理を好むと私達は思いますが、そう思わない人に無理に自分の「信仰」を捨てさせるつもりはありません。心霊主義者達には私達の教えは気に入らないかもしれませんが、私達が信じて教えていることは、彼等の言うことの半分も利己的でも残酷でもありません。

【問】 おっしゃることが分かりません。何が利己的なのですか？

【答】 霊すなわち心霊主義者達の言う本当の「人格我」が戻って来るという教義です。なぜ利己的であるのか少しお話しましょう。デヴァチャン、好みなら至福の場所である天国と言ってもよいのですが、もしデヴァチャンがそのように至福の場所あるいは状態であるとするならば、そこでは当然、悲しみや苦痛を少しも経験することはないはずで、天国では人々の目から神はすべての涙を拭って下さると、「たくさんの約束をしている本」すなわち聖書を読みました。それでも、「死者の霊達」が戻ることができ、地上で、特に自分達の家庭で行なわれていることを見たならば、その霊達は至福など感じられるでしょうか？

神智学はなぜ清浄な「霊達」の戻って来る ことを信じないのか

【問】 どういう意味ですか？ この世を見ることはなぜ、彼等の至福を妨げるのですか？

【答】 ただ次の通りです。例をあげてみましょう。母親が無力な孤児として自分の愛する幼い子供達を残し、あるいは子供と一緒に夫を残して死んだとします。すると母親の「霊」すなわち自我（個性）は、生存中の人格我がもっていた高尚な感情、すなわち子供達への愛、苦しむ人達への憐れみなどで、デヴァチャンの期間中ずっと満たされており、浮世からは全く離れ、あとに残したすべての悲しみを全く知らないことこそ、祝福であると私達は言います。ところか、心霊主義者達は「霊達には肉体で見るよりもっとよく人間が見える」ので、生きていた時よりもっとよく子供達や夫に気づいていると言います。私達の考えによると、死者にとってデヴァチャンの至福はこの世を去ったことはないし、死というものは全くないという確信からくるのです。つまり、母親の

死後の霊的意識では、自分は子供達や愛するすべての人達に囲まれて生きてるので、彼女の死後の状態は最も完全に絶対的な幸せであり、それを損なうようなギャップやつながりは何もないと私達は教えます。心霊主義者達はこの点を全く否定します。彼等の教義によれば、不幸な人は死んでも悲しみから解放されることはありません。むしろ、あの世に入った人は何でも見えるので、いやが応でも苦しみ、悲しみの人生の杯をにがい残りかすまで飲み干さなければなりません。ですから、生前、命をかけて夫を悲しみから助けたいと思っていた愛する妻は、今は全くの無力で、夫の絶望を見、自分が死んだために夫が流す熱い涙を心に銘記することになります。また、もっと悪いことに、夫の涙が間もなく乾き、彼女の子供達の父親である彼に、別の愛する人の顔が見え、自分への愛がその女性に移り、自分の子供達が無関心な人を「お母さん」という神聖な名で呼ぶのを聞いたり、たとえいじめられなくても、小さな子供達がおろそかにされているのを見ることになります。心霊主義者の教義によれば、「不死の生命へと穏やかに漂って行く」ことは、どんな過渡期もなく、いきなり精神的な苦しみの新しい道に入ることになります！ しかも、『バーナー・オーバーライト』というアメリカ心霊主義者達の老練な機関誌は「死んだ愛する者達」からのメッセージでいっぱい、どれも霊達がどんなに幸せかと書いています！ こんな知識をもったら至福を保ち得るでしょうか？ もしそれが至福であるとするれば、そんな至福は最大の災いであり、キリスト教の地獄はそれに比べたら、気晴らしでしかありません！

【問】 あなた方の教えはどのようにしてこれを避けるのですか？ 魂は全知であるという理論と、地上で起こっていることを魂は知らないということとをどう一致させることができるのですか？

【答】 それが愛と慈悲の法則だからです。自我は本質的には全知ですが、デヴァチャンにいる間はいつも、以前的人格我の反映をまとっています。生きている人格我の心に語りかけた、あらゆる抽象的な性質、つまり、愛や慈悲や真善美への愛のような不朽で永遠な属性の理想的な開花は、死後、自我から離れずにデヴァチャンに行きます。それからしばらくの間、自我はこの世で生きていた時の人間の理想的な反映となりますので、それは全知ではありません。もし、全知であるとするれば、自我は私達がデヴァチャンと言っている状態には決して入ることはないでしょう。

【問】 その理由は何ですか？

【答】 もし神智学の哲学の正確な答えをお望みなら、形も色も制限もない永遠の真理を除いては、すべてのものは幻影だからだと申し上げましょう。マーヤーのベールの彼方に身を置いた人、このような方は最高のアデプト達やイニシエート達ですが、そのような方にはデヴァチャンはあり得ません。普通の人間の場合はデヴァチャンでの至福は完璧です。その状態は過去の化身中で苦しみや悲しみを与えたものを全く忘れ去り、また苦しみや悲しみのようなものがあるということさえ忘れてしまいます。デヴァチャンにいる者達は地上の生涯と来世の間の中間の時期を、この世で空しく熱望していたものすべてを与えられ、この世で愛した人々と仲間になって過ごします。魂の憧れのすべてを成就する時がきたのです。地上生活での苦しみの報いである純粋な幸せの存在をこうして何世紀もの間生きるのです。つまり、一層すばらしい至福の出来事だけで満たされた、妨げられることのない幸せの海の中で湯あみをしているのです。

【問】 それは単なる妄想もいいところで、気違いの幻覚ですよ！

【答】 あなたの立場からはそうかもしれませんが、哲学的にはそうではありません。その上、私達のこの世の生活はすべてそのような妄想で満たされているのではありませんか？ あなたはたわいない夢を描いて何年も暮らしている男女に会ったことはありませんか？ ある妻が夫を尊敬し、自分は彼に愛されていると信じているのに、その夫が彼女に不実であることをあなたがたまたま知ったからと言って、彼女にいきなり真実を知らせ、彼女のハートと美しい夢を破るでしょうか？ そんなことをするとは思いません。もう一度言いますが、このような忘却、もし幻覚と言われるなら幻覚でもよいですが、それは自然の慈悲深い法則であり、厳格な正義にしかすぎません。とにかくそれはありきたりの黄金の堅琴を弾く翼のある天使になることよりも、ずっと魅力的です。「生きている魂は、度々天国のエルサレムに昇り、よく知っているその通りを走り回って、太祖や予言者を訪ね、使徒達に挨拶し、殉教者達を賛美する」という約束はある人達にはもっと賞賛に値するかもしれません。けれどもそのほうがずっと欺瞞(ぎまん)的な幻想です。なぜなら、母親達は不死の愛で自分の子供達を愛していることを私達はみな知っていますが、アダムやノアなど「天国のエルサレム」の中にいると言われている人物達の実在はやや疑わしいものです。しかし、私は心霊主義者の冷酷な教義に慰めを求めるよりも、むしろ、宝石屋のショーウィンドウのように、宝石を敷きつめた「新エルサレム」の

ほうを信じたいと思います。心霊主義のいう「常夏の国」はキリスト教の「新エルサレム」よりも少しは自然だが、本質的には同じようにばかげたところです。亡くなった父や母や娘や兄弟の魂達は知性と意識力をもっているのに、あんなくだらない場所で至福を得ることができると考えたら、彼等を全く尊敬できなくなります。この世に残した最愛の人達の罪や誤りや裏切り、とりわけ苦しみを目撃するよう運命づけられ、その人達を助けることもできずにいるのに、清い霊は幸福を感じることができると信じることは、気を狂わせるような考えです。

【問】 あなたの説には何か根拠がありそうですが、そのような解釈をしたことはありませんでした。

【答】 その通りです。そのようなことを想像してきた人は、因果応報の正義の感覚を全く欠いている徹底的な利己主義者に違いありません。私達は先立たれた人達と一緒にいますし、彼等が生きていた時よりもずっと近くにいます。そしてそれはデヴァチャンの空想の中だけではなく、現実にもそうです。なぜなら、清い神聖な愛は人間の心の花であるだけでなく、永遠の中に根づいたものです。霊的で聖なる愛は不死です。このような霊的愛情で互いに愛し合った人達すべてを、カルマは遅かれ早かれ、もう一度同じ家族の中に化身するようにします。また、あなた方は幻影と言うかもしれませんが、墓を越えた愛には生きている者に反応する魔術的で神聖な力があるものです。母親の自我は、身近かに見える想像上の子供達への愛で満たされ、この世で生きていた時と同じように、彼女の自我にとっては現実に思えるような幸福に満ちた生活を送ります。その愛は肉体をもっている子供達にいつも感じられています。それは子供達が母の夢を見たり天佑という言うべき命拾いや事故からの保護を受けたりするような場合に度々起こります。愛は強い楯であって、時空に制限されないからです。全く利己的、または物質的な関係を除き、人間関係と愛着に関しては、同じようなことが言えます。他の場合もこれから推測できるでしょう。

【問】 ではどんな場合でも、生きている人と死んだ人の霊とは交流できないと言われるのですか？

【答】 できる場合が一つ、いや二つあります。一つは死後二、三日の間で、自我がデヴァチャット状態に入る前です。二、三の例外を除いて、霊が客観世界に戻って来ても、生きている人との連絡から良いものを得た場合はほとんどありません。その例外というのは、死にかけている人が、何かの目的でこの世に戻りたく、高級意識を目覚めさせておきたいくらい強い望みをいただいた時ですので、

連絡したのは本当にその人の個性すなわち霊です。死後、霊はぼうっとし、いわゆる「前デヴァチャンの無意識状態」にすぐ入ります。第二の例外はニルマーナカーヤの場合です。

【問】 その場合はどうなりますか？ そしてニルマーナカーヤとはどう解釈されますか？

【答】 ニルマーナカーヤとは涅槃と周期的な休息に入る権利を勝ち得たのに、人類とこの世に残した人々を哀れんで、涅槃に入るのを放棄した方の名称です。涅槃というのはデヴァチャンではありません。デヴァチャンは私達の意識の幻覚、つまり幸福な夢ですが、涅槃に適する人々は、この世の幻影を見たいという欲望も、見る可能性も全くなくした者でなければなりません。このような超人、聖者、どんな名称で呼んでもかまいませんが、このような方々は人類が無知による不幸の重荷に苦しんでいるのに、至福の中で憩うのは利己的な行為だと思って涅槃を放棄し、この地上に霊として目に見えぬままに残ろうと決意されます。この方々は、物質体は脱ぎ捨てておられますが、他の点ではアストラル領域にさえもあらゆる本質をもってこの世に残られます。このような方はわずかな選ばれた人達と交流できますが、普通の霊媒とは決して交流なさいません。

【問】 北方仏教の教えでは、ニルマーナカーヤという名称は仏陀がこの世に現れる時にとられる姿や体につけられたものと、ドイツやその他の国の本で読んだのでお聞きしたのです。

【答】 確かに、そのような姿や体です。ただし、そうしたこの世の体を純粋にアストラル的で主観的なものではなくて、客観的、物質的なものであると思い込んで、東洋学者達は間違いを犯したのです。

【問】 それで、ニルマーナカーヤはこの世にどんなよいことをなさるのですか？

【答】 個人に関してはそんなことはなさいません。カルマに介入なさる権利はお持ちにならず、公益のために尽くすよう人間達に忠告され、激励することしかできません。しかし、あなた方が想像する以上に情け深い行ないをなさいます。

【問】 科学も、近代心理学でさえもこのことは受け入れません。科学や心理学にとっては、肉体の脳がなくなれば知性は少しも生き残ることはできません。そのことにはどう答えられますか？

【答】 お答えしたいときえ思いませんが、M・A・オクソンに伝えられた言葉で簡単に申しませう。「知性は肉体の死後、永続する。それは脳だけの問題ではない。

……私達の知っていることから、人間霊の不滅性を提議することはもつともである」(『霊の本当の姿』六九頁)。

【問】 M・A・オクソンは心霊主義者ではありませんか？

【答】 そうです。私が知っているただ一人の本当の心霊主義者です。小さなことで賛成できない所はたくさんありますが、それはさておき、彼ほどオカルト真理をよく理解している心霊主義者はいません。「どんな犠牲を払わなければならないかを考えずにオカルトの敷居をまたごうとする、準備をしてないのろまのでたらめ屋を取り巻く危険」について、彼は絶えず、私達と同じ警告をしています。私達が同意できないのは、「霊はいかなるものか」という問題だけです。その他は私個人としては、ほとんど全く彼と同意見で、一八八四年七月の演説で、彼が示した三つの主張を私は受け入れます。私達が彼の意見と合わないのではなく、私達と合わないのは、むしろこの優れた心霊主義者のほうです。

【問】 その主張とは何ですか？

- 【答】 (1) 肉体生命と一致する独立の生命があること。
(2) (1)の事実の必然的な推論であるが、この生命は肉体生命よりも長く続くこと。(それはデヴァチャンの間中続くと、私達は言います。)
(3) その状態で生きている者と私達この世に生きている者との間に連絡があること。

心霊主義者達と私達の意見の違いのすべてが、こうした基本的な主張の狭い二次的な面に関係しています。万事、霊と魂、すなわち個性と人格我の見方によります。心霊主義者達はこの二つを一つに混同しますが、私達は二つに分けます。つまり、前に説明した例外のほかは、霊は地上に戻ることはありませんが、人間の動物魂は戻ることもあると言います。しかし、もう一度ここで問題となっている五蘊ごうんの話に戻りましょう。

【問】 だんだん分かってきました。最も清い五蘊のエッセンスは自我にくつついて、生き長らえ、霊のデヴァチャンでの経験のたくわえにつけ加えられます。二つの生の間一度行動の場から消えて償うべきカルマの結果として次の化身に再び現れるのは、物質的五蘊と利己的で人格我中心の動機に関係のある性質です。従って、霊はデヴァチャンを去らないのでしょうか？

【答】 だいたいそうです。応報つまりカルマの法則は、デヴァチャンで最高で最も霊的なものを報い、この世でもっと高い進歩と、その進歩に適した体を与えることで、必ず再び報いるということをつけ加えれば、あなたの言われることは全く正しいと思います。

五蘊について

【問】 肉体の死後、他のもの、つまり人格我の低いほうの諸蘊はどうなるのですか？ 全くなくなるのですか？

【答】 消滅するとも言えますが、消滅しないとも言えます。これはあなたには新しい哲学的、オカルト的神秘でしょう。人格我の使っている材料としては消滅しますが、カルマの結果として、地上界の大気中に浮遊する幼芽のような状態で残っていて、自我が再生したら、新しい人格我に「復讐鬼の群」として取りつこうと、生まれ出てくるまで待っています。

【問】 これはたいへん難しく、私にはとても分かりません。

【答】 いったん、一度詳しいことがすっかり分かれば、難しいことはありません。そうすれば、論理の一貫性、思想の深さ、神聖な慈悲と公平さという点で、この輪廻の教えに並ぶものはないことが分かるでしょう。それは一つひとつの化身する自我、すなわち神聖な魂の絶え間ない進歩を信じ、外から内への、物質から霊への進化を信じることであって、各段階の終わりに、化身する自我は神聖な原理との絶対的統一に達するのです。力からさらに大きな力へ、一つの世界の美と完成から別の世界のさらにすばらしい美と完成へと、周期ごとに新しい栄光、新しい知識と力に到達すること、このようなことがすべて自我の運命であって、こうして自我は各世界と化身での自分自身の救い主となるのです。

【問】 キリスト教は同じことを教えていますし、キリスト教も進歩を教えます。

【答】 そうですが、ただ、他のこともつけ加えます。キリスト教は奇跡的な救世主の助けがなければ救われない、従ってその独断的な教義を受け入れない者達はみな地獄に落ちる運命だと言います。これこそ、キリスト教と神智学の違いです。キリスト教は霊的自我が低級我の段階まで降りてくることを信じさせます。神智学は自分自身をクリストスすなわちブッディ状態へ高める努力が必要であることを心に叩き込みます。

【問】 しかし、高めることに失敗した場合には意識が絶滅すると神智学が教えるなら、形而上学を知らない人々の意見では、「我」の絶滅になるとは思いませんか？

【答】 文字通りに体の復活を信じ、肉体のすべての骨、すべての血管や原子が、最後の審判の日に肉体的に天に上げられると主張するキリスト教徒の見地からは、もちろんそうです。もしも、不死の人間を構成するものは、滅

びるべき体と有限な諸特性であるとまだあなたが主張するならば、私達はお互いに理解し合うことは難しいでしょう。すべての自我の存在をこの地上での一生に限ってしまったら、神様を『プラーナ』に現れる大酒飲みのインドラや残酷なモロクのように、この世に解決のできない混乱を起こしたのに感謝せよと要求する恐ろしい神にしてしまっています。このことが分からないなら、私達は直ちに話し合いをやめるべきです。

【問】 では、もう五蘊の問題は解決したので、死後に生き残る意識の問題に戻しましょう。これは多くの人々が興味をもっている点です。私達はこの世でもっている知識よりも、デヴァチャンではもっと多くの知識をもっているのでしょうか？

【答】 ある意味ではさらなる知識を得ることができます。つまり、生前、養おうと努力した能力が、もしも音楽や絵画や詩など、抽象的で理想的なものに関係があれば、発達させることができます。デヴァチャンは単に地上生活を理想化した主観的な継続にしすぎないからです。

【問】 デヴァチャンで霊が物質から解放されているなら、なぜ、すべての知識がないのですか？

【答】 先ほど申し上げたように、いわば自我は生前の化身の記憶に強く結びついているからです。そこで私の言ったことをよく考え、あらゆる事実をまとめてみれば、デヴァチャン状態は全知の状態ではなく、今終わったばかりの人格我の生活の超越的継続であることに気づくでしょう。デヴァチャンは生活の苦勞からの魂の休養です。

【問】 科学的唯物論者達は、人間の死後何も残らないと断言します。また、人体はただ構成要素に分解するだけであり、私達が魂と言っているものは蒸気のように消える有機的作用の副産物として作られた、一時的な自意識にしすぎないと断言します。彼等の考えはおかしくはありませんか？

【答】 全然、おかしくないと私は思います。もし彼等が自意識は肉体と共に終わると言うならば、その場合、彼等は自分も分からずに予言をしているにすぎません。なぜなら、一たび自分の言うことに確信をもてば、死後、彼等に意識のある可能性はありません。どんな規則にも例外があるからです。

死後と出生後の意識について

【問】 もし人間の自意識が必ず死後も生き残るものなら、

なぜ、例外があるのですか？

【答】 霊界の基本的原則には例外はあり得ません。しかし、見る人達の規則と、盲目のままにいたいと思う人達の規則があります。

【問】 本当にそうですね。それは、自分は太陽を見ないからといって、太陽の存在を否定する盲人の錯覚にしかすぎません。しかし、死後、その人は霊的な目の働きで、見せられることになるでしょう。あなたのおっしゃるのはこのことですか？

【答】 その人は見せられもしないし、何も見ないでしょう。生きている間に、死後に存在が継続することをしつこく否定してきたので、それを見ることはできないでしょう。その人の霊的能力は生きているうちに成長を妨げられたので、死後発達することができず、盲目のままなのです。彼は見るに違いないと言い張ってあなたは明らかに私と違うことを言っています。あなたは霊からの霊、焔からの焔つまりアートマンについて言っておられますが、アートマンを人間魂、マナスと混同しています。……あなたは私の言うことを理解していないようです。はっきりさせましょう。あなたの質問の要点は、全くの唯物主義者の場合、死後の自意識と自己認識を完全になくすことが可能かどうかということです。そうではありませんか？ それは可能です。死後の期間、すなわち今生と来生の間は単なる一時的な状態という神智学のエソテリックな教えを私達は固く信じているので、人生という幻影的な芝居の二場の幕間が一年続こうと、百万年続こうと、死後の状態は基本的法則にはいかなる違反もなく、全くの唯物論者の場合は気絶している人の状態とそっくり同じようなものだと言います。

【問】 あなたは死後の状態の基本的法則には例外はないとおっしゃったばかりですが、どうしてこんなことがあり得るのですか？

【答】 やはり私は、例外はないと申します。しかし、継続についての霊的法則は実在することだけに当てはまります。『ムンダカ・ウパニシャッド』と『ヴェーダーンタ・サーラ』を読んで理解したならば、これはすべてははっきりしてきます。その上、唯物論者が死後自意識を持ち続けることができない理由をはっきりと理解するには、私達がブッディとマナスの二元性と言っていることを理解すれば十分です。マナスの低級面はこの世で働く心の座なので、宇宙についての認識を伝えても、必ずその心が与えた証拠に基づいた認識にしかすぎません。霊的認識を与えることはできないのです。『ムンダカ』の教えによると、ブッディとマナス（自我）、すなわちイーシュヴァラ（*）

とプラジュニャーの間の違いは、実際に、森とその木、湖とその水の違いと同じです。木が生気をなくして一本枯れても百本枯れても森が森でなくなることはありません。

* イーシュヴァラは、顕現した神すなわちブラフマーの集合的意識である。つまり、ディヤーニ・チョーハン達（『シークレット・ドクトリン』参照）の集合的意識である。そしてプラジュニャーはディヤーニ・チョーハン達の個人的智慧である。

【問】 私の理解するところでは、この比喻ではブッディは森であり、マナス・タイジャサ（*）は木です。しかしブッディが不死ならば、それに似ているマナス・タイジャサが新しい化身の日まで意識を全くなくすことが、どうしてあり得ましようか？ 私にはそれが分かりません。

* タイジャサとは、ブッディと合体した結果として「光輝を放つもの」という意味である。つまり、神聖な魂の光輝によって照らされた人間魂（マナス）である。従って、マナス・タイジャサは輝かしい心、霊の光で照らされた人間の理性と言うことができる。そしてブッディ・マナスは神聖な啓示に人間の知性と自意識を加えたものである。

【答】 あなたは全体を抽象的に表したものと、その形体のたまたま生じる変化とを混同しているから分からないのです。ブッディ・マナスは無条件に不死であると言えますが、低級マナスは不死とは言えないことを覚えておいて下さい。単に属性にすぎないタイジャサについては、なおさら、不死とは言えません。マナスもタイジャサも、ブッディと離れて存在することはできません。なぜならば、マナスの低い面はこの世にいる人格我の条件付きの属性であり、タイジャサはブッディの光が反映している同じマナスにすぎないからです。一方、ブッディは人間魂から借りる要素がないと、非人格的霊であるにすぎません。その要素はブッディを条件付け、この幻影的宇宙では、輪廻の全ての期間、ブッディを宇宙魂からいわば分離させます。むしろ、ブッディ・マナスは永久に死ぬことも、結合した自意識を失うこともなく、また、霊的魂と人間魂の二つが密接に結びついた前生の思い出も失うこともあり得ないと言ったほうがよいでしょう。しかし、唯物論者の場合には、そうではありません。唯物論者の人間魂は神聖な魂から何も受けないだけでなく、神

聖な魂の存在を認めることさえ拒絶するからです。この原理を人間魂の属性および性質に当てはめるわけにはいきません。なぜならば、それはちょうど、あなたの神聖な魂は不死だから、あなたの頬の赤みも不死に違いないというのと同じように不条理です。この赤みはタイジャサのように、一時的な現象にしかすぎません。

【問】 私達は本体と現象、原因と結果を混同してはいけないと言われるのですか？

【答】 そうです。タイジャサの光輝はマナスすなわち人間魂だけに限られているので、それが消えるのは単なる時間の問題になると繰り返して申します。なぜなら、不死性も死後の意識も共に、人間のこの世の人格我にとっては、条件付けられた属性にすぎなくなります。不死性と死後の意識は肉体の生きていた間に人間魂自体によって作られた条件と信念に全くよるからです。カルマは絶えず働いています。私達は今まで自分で蒔いたものの果実だけをあの世で刈り取るのです。

【問】 私の肉体が死んだあと、私の自我が全く無意識の状態に入ることができるなら、私の過去生での罪はどこで罰せられるのですか？

【答】 私達の哲学では、カルマの罰は次の化身ではじめて自我に来ると教えます。死後は、自我は過去生で耐えた不当の苦しみ（*）に対する報いだけを受けます。ですから、死後のすべての罰は、何の報いもないことと、至福と休息を全く意識しないというところにあります。という意味では唯物論者でさえ罰を受けます。カルマは霊的自我のすべての思いと動機の結果であると共に、この世の自我の子であり、すべての人に見える客観的人格我という木の働きから生じる果実でもあります。しかし、カルマはまた優しい母でもあり、新しい傷をつけて、この自我をいじめ始める前に、前生の間につけた傷を治します。人生の精神的および肉体的苦しみには、前生の罪の直接の結果でないものは ないと言うことはできても、一方、人間は自分の現実の生活ではその罪を少しも覚えていないので、そのような罰を受けるはずはないと感じて、何も悪いことはしなかったのに苦しんでいると考えます。これだけでも、死後の十分な慰安、休息、至福の権利を人間魂に与えるに足るものです。死はいつも救助者であり、友人として霊的我に訪れます。唯物論者ではあっても、悪人でない人は、生まれ変わりの間、子供の途切れない静かな眠りのように、全く夢を見ないか、またははっきりと意識しないものの画像でいっぱいです。一般の人の場合は、生きていた時のように生々しい夢であって、至福とヴィジョンでいっぱいです。

* ある神智学徒は「不当な苦しみ」という表現に異議を申し立てているが、これは大師のお言葉であり、「不当」であるという言葉の意味は前に説明されている通りである。神智学出版協会のパンフレット六号の中のある文章は同じ趣を伝えるつもりで用いられていたが、『ルシファー』誌の中で批判された。それは言い回しがまずかったので批判を受けたが、本当の意味は、人々は、厳密に言えば自分のカルマではない他の人が行なった行為の結果で苦しむことが多いが、こうした苦しみのための償いは、彼等が当然受けるべきものであるということである。

【問】 では、人格我は自我が起こしたカルマの罰を、何か分からずにいつも受けて行かなければならないのですか？

【答】 そうではありません。誰でも死ぬ瞬間には、たとえ突然の死であっても、自分のこれまでの人生のすべてを細部にわたって見るのです。一瞬のうちに、その人格我は個性と一体となり、全知の自我と一体になります。この瞬間に、生きていた間に生み出した原因を全部引き続いて見ることが十分にできます。この人はお世辞や自惚れで飾られることなく、ありのままの自分を見、理解します。自分が立ち去ろうとしている舞台を見下ろしている見物人として、自分の人生を読みとります。そして自分が受けたあらゆる苦しみが正当であることを知るのである。

【問】 それは誰にでも起こるのですか？

【答】 例外はありません。極めて善良で聖なる人々は、自分が去ろうとしている人生だけではなく、今、閉じようとしている人生での自分を作り上げた原因を生み出した幾生もの前生さえ見ると教えられています。彼等はカルマの法則のもつ尊厳と正義をすべて認めます。

【問】 生まれ変わる前にも、このようなことが起こるのですか？

【答】 ありますとも。死の瞬間に自分が送ってきた人生を追想するように、地上に再生する瞬間に、自我はデヴァチャンの状態から目覚めて、自分を待っている人生の未来のヴィジョンを見、それを決めた原因をすべて悟ります。自我は大昔、カルマの法則に従って物質に降下し、はじめて肉体化身する前は神であったが、生まれ変わる直前に完全なマナス意識を取り戻して再びしばらくの間そのような神になります。「金の糸」はそれに連なっている「真珠」のすべてを知っており、一つも見失うことはありません。

チャクラについて③

編：ジェフ・クラーク

タトヴァについて

「秘教部門の教え」より (HPB 文集 1 2 巻)

7つのチャクラは頭の中にある。これらのマスター・チャクラは身体の7つの主な神経叢（7つがあるから）と、生理学が名前を与え用としないより小さな42のチャクラを支配して管理している。顕微鏡は客観的な世界においてそれらの中枢を発見したことがないが、それはどうということがない。「運動神経」と肉体・精神のあらゆる感覚を伝える「感覚神経」の相違をどの顕微鏡も見つけたことがないし、これから見つけることがなかろうが、生理学の論理だけでその相違があることを示すであろう。そしてこの文脈の「神経叢 (plexus)」は西洋人の心にとって解剖学の言う plexus とズレがあると思われたら、その代わりにチャクラ、パドマ（ハスの花）、車輪、ハスの花の芯と花卉など呼んでいい。生理学は不完全ではあるが、体の外部・内部に様々な7つ組みがあることを示してくれる。頭の七つの孔、脳の基部にある7つの「器官」、7つの神経叢（咽頭神経叢、喉頭神経叢、海綿神経叢、心臓神経叢、上腹部神経叢、下腹部神経叢、仙骨神経叢）などの例がある。

時が来ると、秘教部門の部員はマスター・チャクラについて細かいことを教えられて、その使い方も教えられよう。その時まで、もっと優しい科目を学ばなければならないのである。タトヴァの行動の中心である7つの中枢 (seven plexuses) がロゴスの7つの光線が振動する中心であるかと聞かれたら、私は肯定的に答えるが、実際はロゴスの7光線は原子一つ一つに振動していると付け加えよう。

フォーハットの息子たちは運動・音・熱・光・凝集力・電気（または電氣的流体）・神経の力（または磁気）と一般的に呼ばれている諸力の擬人化したものであると『シークレット・ドクトリン』でほとんど明らかにされている。しかし、学徒はこの真理を知っているからと言って、宇宙

レベルのクンダリーニーと生体のクンダリーニーと、言い換えれば電氣流体と神経の力との波動を合わせて調和させることができるとは限らない。しかし、そのように調和させなければ、学徒は自分の死滅をもたらすに違いない。一つの力は約1秒30フィート（27.4メートル）の速さで動き、片方は1秒11万5千リーグ（6.39億メートル）の速度である。パラシャクティ、ジュニャーナシャクティ等々と呼ばれる7つのシャクティは、フォーハットの息子たちと同じ意味であり、その女性的局面である。今の段階では、それらの名前を西洋人の学徒に教えたら、ただ混乱を起こすだけだろうから、上に英語に直したその同義語を覚えておけば良い。7つの力それぞれは七重なので、その総計は49である。

音は、当然呼び起こすことができる聴覚的な印象の他に光と色の印象も起こすことができるか否かという問題を、現在、科学は討議にかけているが、オカルト科学は遠い昔にその問題を解決した。物体の各々の衝撃や振動は空気の中に一定の振動を生み出して、耳に作用できる音を起こす物理的粒子の衝突を起こすが、同時に音に相応する閃きを生み、その光はある特定の色を帯びる。秘められた諸力の領域では、可聴音は主観的な色に過ぎず、可視色は聞こえない音に過ぎないのである。そして両方は、かつて物理学者は「エーテル」と呼んだが今は様々な名前を持っている潜在的な実体から生じる。私たちオカルティストはそれを、目に見えぬ可塑性の空間と言う。これは逆説的な仮説に思われるかもしれないが、裏付ける事実が十分ある。例えば、全く耳の聞こえない人でも音を聞き分ける可能性がある。音が耳の聞こえない患者の心によって受け入れられ、色彩のある印象という形で心を通して視覚の器官に伝えられたケースがいくつも医学資料に記録されている。半音階の中間音がかつて色で書かれたという事実は、古代のオカルトの教えが無意識のうちに記憶されていたことを示す。すなわち、色と音は、自然界の最初の分化した実体 (substance) の、私たちの世界で互いに相応する7つの局面の2つのも



のである、という教えである。

色と振動の相互関係の次の事例は、オカルティストたちの注目を値することである。アデプトとその上位の弟子だけではなく、透視能力や精神測定能力（サイコメトリー）などの持ち主というより低い段階の超常能力者にも、一人一人の人間の周りにその人の気性に従って変わる色とりどりのサイキック・オーラが見える。すなわち、オーリック・エッグの中の神秘的な記録は、訓練を受けたアデプトだけの「世襲財産」ではなく、時によって生まれながらのサイキック能力者もアクセスできるものである。人間のありとあらゆる感情、思い、性質がそれに相応する色と色合いによって示され、ある色彩が認識されるというよりも感じ取られるものである。ガルトンが示したように、最も優れたサイキック能力者は楽器によって作られた振動を色として認め知る。つまり、音符それぞれは別の色を思い起こさせる。糸が振動して耳に聞こえる音符を起こすと同じように、プラーナの循環する生気の一般の刺激の下で様々な感情に

応じて人身の神経は震え、その人のサイキック・オーラの中で波動を起こし、その結果として色彩現象を生み出す。

従って、全体として人間の神経系をエオリアンハーブのようなものと見なせば良い。それは、抽象物ではなくて力強い現実である生命力の衝撃に反応して、色彩現象の形で個人の性格の最も微妙な局面まで顕現させる。神経の振動を十分に強化してアストラル元素（astral element）の振動に結びつけるならば、音が現れてくる。このことを考慮に入れると、小宇宙の力と大宇宙の力には相互関係があるという事実を疑うはずがあるだろうか。

ラーマ・ブラサド氏が解説したタントラ派の書物及び時々神智学の雑誌に掲載される同じようなタントラ系のヨーガ論文（注意：真のラージャ・ヨーガの論文が決して公開されない）は黒魔術向きのものであり、精神的トレーニングの手引きとしては極めて危険であることを上に明らかにしたので、秘教を勉強しているアメリカ人が十分に警戒するよう私は望んでいる。

<p>『睡蓮の牧歌』 著：メイベル・コリンズ 電子書籍 Kindle 版 訳：星野 未来 定価 333 円</p>	
<p>【本書について】 神智学の世界でも有名なメイベル・コリンズによる物語。いにしえのエジプトで主人公センサが体験したこと。「この物語は恐らく実話であろう」（T・スバ・ラウ）とされています。欲望のむなしさ、魂の悲劇。</p>	<p>『オカルト化学』 著：C.W. リードピーター 電子書籍 Kindle 版 1000 円 アニー・ベサント 単行本 3400 円 訳：STO 斎藤潤翻訳事務所</p> <p>【本書について】 3次元世界の探求のみの現代物理学とは違い、神の創造された世界から見て、3次元物質世界と4次元以降の霊的世界を探求&研究した神智学が、H.P. ブラヴァツキーのよって1800年代に始まりました。本書は、19世紀最大のオカルティスト、H.P. ブラヴァツキーの最愛の弟子リード・ピーターおよび、アニー・ベサントによる化学構造物の霊的透視研究の報告書です。現代物理学を超越して物質の正体に肉薄し、究極の物理的原子（アヌ）を解明しており、例えば水素は18個のアヌ、金は3546個のアヌによって構成されていることが判明しており、18で割ると現代物理学の周期律表にも合致しています。霊的物理学に興味のある方は必読の書籍です。</p> <p>詳しくは UTU PUBLISHING のHPで www.utyu-publishing.com</p> 

神智学協会ニッポン・ロッジ 勉強会のお知らせ

神智学協会ニッポンロッジでは、「神智学研究会」として毎月1～2回、神智学書籍の解説や講義、意見交換等を行っております。神智学の知恵を深めていただくためにもぜひご参加ください。日時はホームページ (<http://www.theosophyjp.net/>) にてお知らせしております。また、神智学の教えを広めるため、各地で勉強会を開催していただける方を募集しております。ご興味ある方は、神智学協会ニッポン・ロッジまでご連絡ください。

関東地区

【日程】 HP (www.theosophyjp.net/) にてお知らせします。

【時間】 10時～12時

【場所】 東京芸術劇場 会議室

東京都豊島区西池袋 1-8-1 JR 池袋駅西口より徒歩3分

【費用】 会員 1,000円 非会員 2000円

四国地区

【日程】 毎月1～2回

【場所】 HPにてご確認ください。

【費用】 無料

神智学協会ニッポン・ロッジ ご案内

神智学協会ニッポン・ロッジは、世界各地に支部を置き活動している神智学協会(The Theosophical Society)国際本部インド・アディヤールの日本支部です。神智学協会ニッポン・ロッジは、神智学協会の目的の遂行と神智学協会が提唱する神智学の教えの普及活動を行っています。

神智学協会の目的

- 1) 人種、信条、性別、階級、皮膚の色の相違にとらわれることなく、人類愛の中核となること。
- 2) 比較宗教、比較哲学、比較科学の研究を促進すること。
- 3) 未だ解明されない自然の法則と人間に潜在する能力を調査研究すること。

- 神智学協会ニッポン・ロッジの会員は、神智学協会国際本部（インド・アディヤール）の会員名簿に登録されます。
- 神智学協会ニッポン・ロッジの会員制度は1年ごとの会費納入（年会費5,000円）による更新制となります。
- 神智学協会ニッポン・ロッジの会員は、会報誌「テオソフィア」の配布を受けます。（海外の方はEメール版）

神智学協会ニッポン・ロッジ 支援基金

神智学協会ニッポン・ロッジでは、神智学の教えを普及するために会の活動を支援することを目的として、神智学協会ニッポン・ロッジ支援基金を設立し皆様からの寄付を募っております。

支援基金：一口 1,000円

納入方法：銀行振り込み

納入口座：ゆうちょ銀行 00八支店

普通 98936871 神智学協会ニッポンロッジ

ゆうちょ銀行からの専用振替口座

記号：10070

番号：98936871

神智学協会ニッポンロッジ

会報誌について

神智学協会ニッポン・ロッジ会報誌「テオソフィア」は2ヶ月ごと、年6回発行されます。会報誌についてのお問い合わせは、メール又はお手紙にてお願いいたします。【Eメール】 info@theosophy.jp

【住所】 〒289-0617 千葉県香取郡東庄町羽計 2565-7 神智学協会ニッポン・ロッジ 【編集部】 當麻・岡本

